

美術の窓(144)

絵入折手本をご存知ですか

大和文華館館長 浅野秀剛

2年前から、リチャード・レインコレクションの調査のため、2月～3月にハワイのホノルル美術館を訪れている。科研費『在外絵入り本を中心とする書誌・出版・解釈の総合的研究』(研究代表者 山下則子 課題番号26300020)での調査の一環で、今年はその3回目で1週間滞在した。ハワイといっても、海も山もなく、ひたすら収蔵庫に籠る毎日。しかし、私たちのような人種には至福の時である。

私が去年から今年にかけて調査したのは、折手本で、その中心は絵入折手本。折手本といってもほとんどの人はご存知ないと思うが、江戸時代、寺子屋で手習いの子どもが手本にしたもので、形は折本形式のお経を思い起こしていただけにイメージがつかめるであろう。江戸時代の寺子屋の図を見ると、子ども一人一人の机の左上に置かれているものである。折手本には先生による手本が書かれていて、それを見て子どもが稽古するのである。寺子屋の図の折手本に絵があるのは見たことがないが、伝存するのは絵入りのものが多く、使われているもの(手本が書かれているもの)と未使用のものが混在する。

私は、2年前のこの欄(136)で、レインコレクションのことに触れ、その次の(137)で、兵庫県立歴史博物館の入江コレクションにある約80本の折手本のことに少し触れた。今回は、レインコレクションの47本の折手本の概要を記し、その絵入りのものは、浮世絵版画の歴史に寄り添って制作され、その歴史

を閉じたということを述べてみたい。

レインコレクションの47本の折手本の内訳は、絵入りが34本、絵なしが13本で、絵入折手本のうち、肉筆画で未使用のもの1本、墨摺筆彩で未使用のものが1本、墨摺筆彩で墨書入りのものが4本、二色摺で墨書入りのものが4本、二色、三色摺で未使用のものが1本、多色摺で未使用のものが2本、多色摺で墨書入りのものが20本、合羽摺で墨書入りのものが1本である。絵のない13本については、墨で手本が書かれているだけ(未使用のものはなかった)であり、書に造形的興味がなく、書かれた内容にも格別興味のない私の研究の枠外ということで、考察から省くことをどうかご容赦いただきたい。

絵入りのもので特に興味深かったのは、肉筆画で未使用の1本である。それは、今までに200本ほど絵入折手本を見てきた私が初めて接する、版画でないものであった。30.7×7.6cmで、雲母引き絹目地の厚紙を使用し、約30.7×42.8cmの紙を10紙継いで描かれている(図1)。描かれているのは、花鳥や馬、大黒天などで、テーマが一貫してなく描写も素朴の域を出ないものであるが、雅な趣は感じられる。それが果たして子ども向けの折手本に供されたものなのかという疑問も残るが、墨摺筆彩の絵入折手本に連なる様式を示すという点から、初期(具体的な年代は分からないが、17世紀後半から18世紀初め頃)の絵入折手本であると推定される。絵は、紙継の上にも認められるので、あらかじめ紙を継いでから描い

たことが分かる。墨摺筆彩や多色摺のものは、当然ながら摺った後で紙を継いでいるので、その点が異なる。

肉筆画の1本に続くと思われるのが墨摺筆彩の絵入折手本であり、レインコレクションだけでも5本ある。5本中、4本がやはり雲母引き絹目地の厚紙を使用した豪華なもので、そのうちの「どうけ七福神」と題した1本を示しておきたい(図2)。「庶民風俗」と仮題した雲母引き絹目地でない1本も、紙は厚手の楮紙で、後世の多色摺のものに比して作りも豪華である。未使用のものであるが、小図を散らして墨書の妨げにならない配慮がうかがえる(図3)。

レインコレクションには、制作年代の判明するものは残念ながら幕末のもの以外なかったが、入江コレクションには、享保20年(1735)の墨書入りのものがある。それは、雲母引き絹目地に子どもの風俗を描いた墨摺筆彩のもので、それらによって、雲母引き絹目地に墨摺筆彩の絵入折手本がおおよそ18世紀前半に制作されていたことが判明する。入江コレクションには、宝暦9年(1759)の墨書入りのものもあった。それは雅趣ある往古の風俗を描いたもので、墨摺筆彩ではあるが雲母引き絹目地紙ではなく、表紙も単なる濃紺表紙なので、宝暦頃には、大分簡素になったものと推定される(いつの時代でも高価なものから安価なものまでさまざまなものが作られたと仮定すべきであるが、ここではおおよその流れを述べるため厳密性は捨てて。また、絵入折手本の歴史はまだ研究途上にあることをお断りし

ておきたい。)

多色摺のもののほとんどが19世紀のものと推定されるので、二色摺、あるいは二色、三色摺のもの5本は、その間に位置すると考えたいが、残念ながら年代を特定する資料に乏しい。ここではおおよそ18世紀後半を想定しておきたい。江戸の浮世絵版画の歴史において、二色摺の紅摺絵が出現するのは寛保2年(1742)、多色摺版画の完成形である錦絵の誕生が明和2年(1765)であるから、絵入折手本の歴史はそれより少し後ろにずれてくると予想している。

そして、18世紀後期から19世紀前期に多色摺の絵入折手本が制作される。レインコレクションにもそれが23本(合羽摺も含む)あったように、現存する絵入折手本の大半は多色摺のものである。その中から、美術の窓(137)で紹介した入江コレクションの「富士三十六景」と同じものを掲出しておきたい(図4)。入江コレクションは、10図がパラパラの状態では保存されていたが、レインコレクションは、当初の折手本の形で保存されていたのである。「富士三十六景」は葛飾北斎画「富嶽三十六景」の図をもとに制作されたもので、江戸で流行した錦絵を模倣した典型例として興味深いものである。

絵入折手本は、明治になり、新しい教育制度が導入されると急激に姿を消すが、その歩みは、ミニ浮世絵版画史といった様相を呈しているのである。

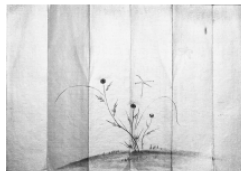


図1



図2



図3



図4

季刊 美のたより No.202

平成30年 4月 13日

発行 大和文華館